

清代江南における代言体弾詞の出版について

清代江南における代言体弾詞の出版について

—「弾詞総目録」を基礎資料とした量的研究—

田中 譜美

1. はじめに

弾詞は南方で流行する講唱文学の一つで、特に清代乾隆年間から民国にかけて、江南地域で大量の作品が刻本や石印本の形で刊行されていた。そしてその多くを占めるのは、テキスト中に登場人物同士の白(せりふ)を多く含む「代言体」、「説唱本」、「土音弾詞」等と呼ばれる弾詞作品で、七言句を主とする叙事体弾詞とは通常区別される¹。日本の弾詞研究の先駆である倉田淳之助も「弾詞攷」(『東方学報』第21号,京都大学人文科学研究所編,1952年 pp136-137)において、「弾詞の体には全巻叙事のものと、書中の人物の口吻を表すものとあり、多くの弾詞を検すると、後の体は清朝の嘉慶中の刊本に至って表われ、しかもこの体が現れると俄然盛大となり、この体の活用が弾詞を盛大ならしめたように考えられる。(中略)しかも注意すべきはこれらがみな呉語の方言を説白に使って居り、呉語地域に於てこの体が開拓されたことを示す」と指摘しており、清代嘉慶期以降にこの代言体弾詞が江南の呉語地域で大変流行していたとされる。

ところが、代言体弾詞の版本の多くに刊行年や刊行元(書肆名)が明記されていないこともあり、代言体弾詞の作品群がいつ、どこで、どれほど出版されていたのか、その出版活動についてはほとんど明らかにされていない。よって本稿では、現在最大規模とされる弾詞目録の書誌情報をデータ化し、それを集計することによって、代言体弾詞の出版状況を明らかにする²。また、代言体弾詞の出版状況を小説や宝巻といった近隣ジャンルの出版状況と対比させながら、代言体弾詞出版の背景について考察し、清代江南文芸界における代言体弾詞の位置づけを試みる。

なお、基礎資料とする盛志梅「弾詞総目録」(華東師範大学 2002 年博士論文『清代弾詞研究』附録)には弾詞 540 余種 1700 余点が収録されるが、これには清代の弾詞を主に収録したとあり、民国以降の鉛印本や石印本等が意図的に収集されていない可能性があるため、本稿では主に刻本を集計対象とした。「弾詞総目録」に刻本は 280 余種 740 余点収録され、作品種類は全体の半数以上、点数は全体の 4 割強を占める³。また、集計対象となる代言体弾詞の作品は 65 種で、この代言体弾詞の選定にあたっては、倉田淳之助「呉語研究書目解説」弾詞編(『神戸外大論叢』第 3 巻 4 号,1951 年)、周良『弾詞経眼録』(江蘇文芸出版社,1996 年)、輪田直子「蘇州弾詞における説唱形態の特徴」(『東北大学中国語学文学論集』第 1 号,1996 年)、輪田直子「清代弾詞受容に関する一考察—車王府蔵弾詞を手がかりに」(『集刊東洋学』第 82 号,2000 年)等の分類を参照し⁴、さらに筆者が中国国家図書館、上海図書館、蘇州図書館にて目睹した作品も含む⁵。但し、未分類の作品の中にも、今後の調査によって代言体弾詞と判定・分類される作品が含まれている可能性があるため、本文中には「弾詞総目録」に収録される弾詞刻本全体のデータ(未分類の弾詞作品や叙事体弾詞も含む)を、代言体弾詞 65 種のデータと併せて提示する。今回代言体弾詞の作品とする 65 種の略称は下記の通りである(ピンイン順)。

八美图(武八美) 八美图 白獺傳 百花臺 百花圖 百鳥圖 碧玉環
碧玉獅 大紅袍 大雙蝴蝶 飛虎槍 風箏誤 鳳凰圖 芙蓉洞 拱壁緣
海公奇案(玉夔龍) 何必西廂 還金鐲 輓龍鏡 換空箱 黃金印 繪真
記 金臺傳 錦香亭 九龍陣 九美图(合歡圖) 九絲條 雷峰塔白蛇傳
六美图 鸞鳳雙簫 落金扇 梅花韻(真金扇) 描金鳳 鬧盧莊 盤龍鐲
麒麟豹 麒麟閣 巧合三緣(金桂樓) 三笑新編 神女夢 十美图 十五
貫 雙冠誥 雙金錠 雙帥印 雙玉杯 雙玉燕 雙珠鳳 雙珠球 水晶
球 四香緣 天寶圖 萬花樓(雙連筆) 文武香球 一箭緣 一捧雪 義
妖傳 玉連環(鐘情傳) 雲琴閣 蘊香丸 倭袍傳(果報錄・荊襄快談錄)
真八美图 珍珠塔 珠玉圓 醉芙蓉

2. 代言体弾詞の刊行点数の推移

先ず代言体弾詞の刊行点数の推移を把握するために、「弾詞総目録」における弾詞の収録点数を年代別に集計した。表1は、刊行年が明記される刻本434点中、1730年代から1930年代の間に刊行されたものについて、各年代における収録点数、及びそこに含まれる代言体弾詞の点数を併せて

表1. 刊行年代別収録数

(単位:点数)

年 代	弾 詞	
		代言体
1730-1739	1	0
1740-1749	3	0
1750-1759	2	0
1760-1769	7	2
1770-1779	6	4
1780-1789	14	4
1790-1799	8	1
1800-1809	29	19
1810-1819	51	39
1820-1829	40	26
1830-1839	23	15
1840-1849	42	15
1850-1859	16	4
1860-1869	41	21
1870-1879	68	34
1880-1889	20	6
1890-1899	32	14
1900-1909	10	0
1910-1919	7	0
1920-1929	2	0
1930-1939	1	0
総 計	423	204

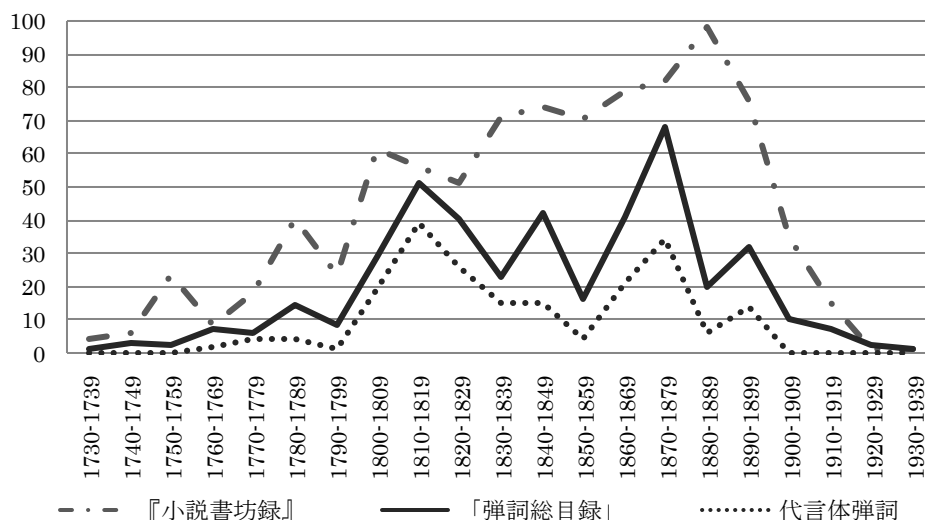
※「弾詞総目録」をもとに作成。

示したものである。これを見ると、1800年以降に弾詞刻本が急増する頃、代言体弾詞も同時に増加しているのがわかる。1800年代から1820年代の30年間における代言体弾詞は84点で、代言体弾詞総数204点のおよそ4割以上を占めている。また作品種類について数えてみると、1820年代以前に先述の代言体弾詞65種中46種、つまり約7割が含まれていた。ところがその後、1830年代から1850年代にかけて、そして1880年代に代言体弾詞の点数は減少しており、その影響かこの時弾詞全体の点数もあまり伸びていない。嘉慶年間(1796年-1820年)の刻本が非常に多く、当時盛んに出版活動が行われていたことが窺えるのに対し、道光年間(1821年-1850年)後期から咸豊年間(1851年-1861年)にかけて一旦低迷した印象を受けるのである。弾詞が代言体弾詞の興起によって嘉慶期に発達したと捉えられるのは、以上のような傾向による。

この刊行点数の推移が弾詞特有の傾向であるのかどうか、近隣ジャンルである小説についても同様に調べ、表1の弾詞のデータと比較してみた(図表1)。小説については、王清原、牟仁隆、

韓錫鐸編『小説書坊録』(北京図書館出版社 2002 年, 原版春風文芸出版社, 1987 年)に収録される刻本計 903 点を集計対象としている⁶。これによると、小説は 1800 年代以降も 1890 年代に刻本から石印本に移行するまで比較的順調に増加しており、弾詞のような極端な起伏がみられないのがわかる。

図表 1. 刊行年代別収録数の推移 (単位: 点数)



それでは、弾詞が 1830 年代以降に小説のような増加傾向をみせないのは何故だろうか。表 1 や図表 1 における弾詞と小説のデータは、各目録中に刊行年が明記されるもののみを集計しており、当時の刊行点数を厳密に表しているわけではない。しかしながら、このようにジャンルによって傾向に差が見られるのは、当時の出版状況がそれぞれ異なっていたことをある程度示唆していると考えられる。

3. 代言体弾詞の主な刊行地

代言体弾詞のテキスト中には、七字句の唱詞に加えて登場人物や語り手による白があり、特に道化役や端役の白には通常呉語が使用される。この

清代江南における代言体彈詞の出版について

代言体彈詞の地域性に着目して、各年代における彈詞の刊行地について調べた(表 2)⁷⁾。1730 年代から 1930 年代の間に刊行された彈詞刻本 423 点中、書肆名を記すものが 272 点ほどあり、そのうち具体的な地域を特定できたものは 81 点である。表の括弧内の点数は代言体彈詞の内訳数を示している。

表 2. 各年代における彈詞の刊行地別収録数

(単位:点数)

	蘇州	上海	杭州	揚州	無錫	北京	南京	紹興	常州
1730-1739									
1740-1749	1								
1750-1759									
1760-1769			1(1)						
1770-1779	2(2)								
1780-1789	1								
1790-1799	2								
1800-1809	4(1)	2(2)	1(1)						
1810-1819	10(8)	1(1)							
1820-1829	7(5)		1(1)	1			1		
1830-1839			1(1)	1	2(2)		2(2)		
1840-1849	2(2)	1(1)	1	4(1)		2			
1850-1859	1(1)								
1860-1869			1(1)		1(1)			1(1)	
1870-1879	5(2)		2(2)	1				1(1)	1(1)
1880-1889	1				3(3)	2			
1890-1899		5(4)	2(2)						
1900-1909				1					
1910-1919		1							
1920-1929									
1930-1939		1							
総 計	36(21)	11(8)	10(9)	8(1)	6(6)	4	3(2)	2(2)	1(1)

※「彈詞総目録」をもとに作成。

この表から、彈詞は北方よりも江南地域でより多く刊行されており、特に代言体彈詞については蘇州、杭州、上海の順に多いという傾向が見てとれる。そして蘇州における代言体彈詞の刊行点数を見てみると、1800 年代から 1820 年代にかけて計 14 点ある一方で、1830 年代から 1850 年代

にかけては計 3 点である。この推移の仕方は、表 1 及び図表 1 における代言体彈詞の推移の仕方と非常によく似ており、このことから代言体彈詞の刊行点数と蘇州の刊行点数とは何らかの関連性があったのではないかと推測される。

刊行点数と刊行地の関連性を確認するために、『小説書坊録』に収録される小説刻本についても、同様に刊行地を調べてみた(表 3)。1730 年代から 1930 年代の間に刊行された小説の刻本 903 点中、刊行地が特定できたのは 416 点である。特定された地域は 50 以上にのぼるため、ここでは点数の多い上位 13 地域、計 272 点について示している。

表 3. 各年代における小説の刊行地別収録数

	(単位:点数)												
	北京	蘇州	上海	南京	揚州	広州	杭州	廈門	佛山	成都	重慶	東昌	常州
1730-1739	1	1											
1740-1749		1											
1750-1759		3		2									
1760-1769		1		1			1						
1770-1779	1	7											
1780-1789		5		2	1	1	4						
1790-1799		4	1	1				1					
1800-1809	2	6					2					1	
1810-1819		4		2	4			1					
1820-1829	1	4		2	1			2		2			
1830-1839	3	3	2	5	1		3	1	1				
1840-1849	4	2		1	1	1				2			
1850-1859		1	1	2	2	3		4	2	2	1		
1860-1869	1	4		1	3	8		2	6	2	1		1
1870-1879	4	2	1		2	2	1	2	5		1	1	2
1880-1889	23	3	16				1			2	1	2	1
1890-1899	15	2	3			1	2	1		3	2	2	1
1900-1909	4		2	1	1			1			1		1
1910-1919	3		1								1		
1920-1929										1			
1930-1939							1						
総 計	62	53	27	20	16	16	15	15	14	14	8	6	6

※『小説書坊録』をもとに作成。

清代江南における代言体彈詞の出版について

蘇州の刊行点数を見ると、1770年代以降あまり伸びず、1800年代から1820年代にかけて計14点あるが、1830年代から1850年代にかけては計6点である。そして刊行地は蘇州・南京等江南地域から、徐々に福建の廈門や広東の広州・佛山、四川の成都・重慶等に拡大し、1880年代まで時代が下ると北京・上海における刊行点数が急増しているのがわかる。

清代刻本の書肆について、張秀民『中国印刷史』（浙江古籍出版社、2006年、原版上海人民出版社、1989年）第1章では、北京、蘇州、広州の順に書肆が多く、南京、杭州は明代に及ばないが、広東佛山、江西金溪湾、福建長汀四堡郷等各省にも書肆があったこと、そして阿片戦争後、上海が徐々に北京に取って代わったと概括している。また清代白話小説の刊行地の拡大については、上田望「毛綸、毛宗崗批評「四大奇書三國志演義」と清代の出版文化」（『東方学』第101輯、2001年）で既に論じられており、明末清初出版界をリードした江南に対し、道光以降に生産、消費、流通の各面で力を蓄えていた四川等の地域における出版活動が活発になったことが指摘されている。

このような視点から図表1を見ると、小説が道光後期以降も順調に点数を増加させていった背景には、江南地域以外にも四川や広東といった地方出版の隆盛があったと考えられる。これに対し代言体彈詞は、呉語を多量に含むという地域性をもつことから刊行地が全国に拡大せず、結果的に1830年代以降の減少傾向が表れたと考えられるのである。

4. 道光・同治年間における禁書の影響

江南地域における代言体彈詞の刊行点数が道光後期以降あまり伸びない理由の一つとして、道光17年(1837年)と道光18年(1838年)に蘇州、道光24年(1844年)に浙江、同治7年(1868年)に江蘇で行われた一連の禁書活動の影響が考えられる。清代に禁書は幾度も行われたが、“淫詞小説”を対象とする禁書は、特に道光以降江南地域で三度にわたって大規模に行

われ、弾詞作品も少なからずその対象となっていた。

小説や戯曲の禁書関係の史料を収録する王利器『元明清三代禁毀小説戯曲史料』（上海古籍出版社、1981 年増訂本、原版作家出版社、1958 年）によると、乾隆年間に禁書に遭った“淫詞小説”は具体的な作品が十種ほどしか数えられないのに対し、道光以降の公式文書には禁書対象とされた作品名が百種以上記載されている。道光 17 年「淫書目単」には 116 種、道光 24 年「禁毀書目（応禁各種書目）」には 120 種、そして同治 7 年には「応禁書目」122 種・「小本淫詞唱片目」111 種・「続查応禁淫書」34 種の計 267 種の作品名が挙げられている。藩建国『中国古代小説書目研究』（上海古籍出版社、2005 年）第 6 章では、重複を除くと禁書対象となった“淫詞小説”は計 161 種とあり（ここには同治 7 年「小本淫詞唱片目」を含まず、光緒 16 年（1890 年）「応禁淫詞小説書目」の 112 種を加える）、その内訳は白話小説 90 種、文言小説 8 種、戯曲 2 種、弾詞 30 余種、その他白話小説か弾詞か判別できないものが 30 余種あるという。作品名だけからそれが弾詞であるのか判断するのは難しいが、試みに「弾詞総目録」と照合すると、「淫書目単」に 14 種、「禁毀書目」に 13 種、「応禁書目」に 13 種ほど弾詞と思われる作品が確認でき、それらの作品名はほぼ重複している。この道光 17 年の「淫書目単」の内容が道光 24 年と同治 7 年に引き継がれたのは、地方郷紳らが資金を出し合い書肆から版木や書物を買取るという道光 17 年の蘇州における禁書活動の様式そのものが、以後模範となって他地域に波及したことと関係する。道光 17 年の蘇州の禁書に関して「勸收毀小本淫詞唱片啓」には、「以前蘇州の郷紳が上申して法令を出し、部局を設けて買取りを行い、各書肆の淫書板木を全て毀し、永禁の旨を刻石し、数百年におよぶ風俗人心の大害を一日にして取り除いたことは、快事であり盛事である（往年蘇郡紳士、曾稟奉大憲出示、設局收買、將各書店淫書板片、一律繳毀、勒碑永禁止、使数百年風俗人心大害、一日掃除、快事也、亦盛事也）」⁸と称えられ、「刪改淫書小説議」にも「江蘇の郷紳は遂に淫書の禁燬を行った。万金を費やし、各書肆が永禁を誓うこと誠に盛典である（江蘇紳士遂有禁毀淫書之举、計費万余金、各書坊均

取具永禁切結、誠盛典也)」⁹と記されている。そして、「闔省紳士上学憲請示禁淫書并設局收毀公呈」によると、「江蘇紳士が前年上申した各法令を調べるに、禁令を出して部局を設置し、期日内に回収して毀し、各書肆は書を納めて代金を受け取った後、県庁に赴いて適切な証文を提出するという。現在成案が刊刻されて広まり、彼方此方で倣われている。浙省の書肆及び貸本屋が所蔵する淫書の版本や書物のみが、まだ収毀されていない(窃查江蘇紳士曾於前歲稟請各憲、示禁設局、限日收毀、各舖於繳書領価後、赴県出具切実甘結、現有辦理成案、刊刻伝布、遠近倣行。惟浙省書舖及稅書舖所藏淫書版片書本、尚未收毀)」¹⁰とあり、浙江の郷紳が禁書を上申する際、“江蘇辦理成案”及び“捐資設局章程”が添えられていたのである。その後、同治7年江蘇巡撫丁日昌による禁書で対象作品がさらに加えられ、「小本淫詞唱片目」には弾詞と思われる作品が4種¹¹、さらに「続查兇禁書目」にも弾詞と思われる作品が26種ほど確認できる(光緒16年「兇禁淫詞小説書目」は未見)。これらの重複を除くと禁書対象となった弾詞作品は以下の44種である(ピンイン順。下線部は代言体弾詞)。

百花臺 百美圖 百鳥圖 白蛇傳 碧玉獅 碧玉塔 燈月縁 芙蓉洞
何必西廂 合歡圖 何文秀 換空箱 錦香亭 九美圖 劉成美 龍鳳金
釵 鸞鳳雙簫 梅花韻 盤龍鐲 巧連環 七美圖 三笑姻縁 十美圖
雙鳳奇縁 雙剪髮 雙玉燕 雙珠鳳 四香縁 探河源傳 桃花影 天
寶圖 天豹圖 萬花樓 文武香球 倭袍(果報録) 一線縁 義妖傳
玉連環 玉連環 玉蜻蜓 玉堂春 玉鴛鴦 診脈通情 鍾情傳

このように、公式文書に禁書対象の作品が具体的に記されており、道光以降“淫詞小説”の禁書活動が大々的に行われたことが窺える一方で、禁書が完全な効果をもたなかったこともしばしば指摘されている¹²。岡崎由美「弾詞『倭袍伝』の流伝について」(『中国古籍文化研究』第3号,2005年)では、代言体弾詞『倭袍傳』が度重なる禁書令に遭いながらも『果報録』や『荊襄快談録』と題名を替えるなど書買たちの工夫によって出版さ

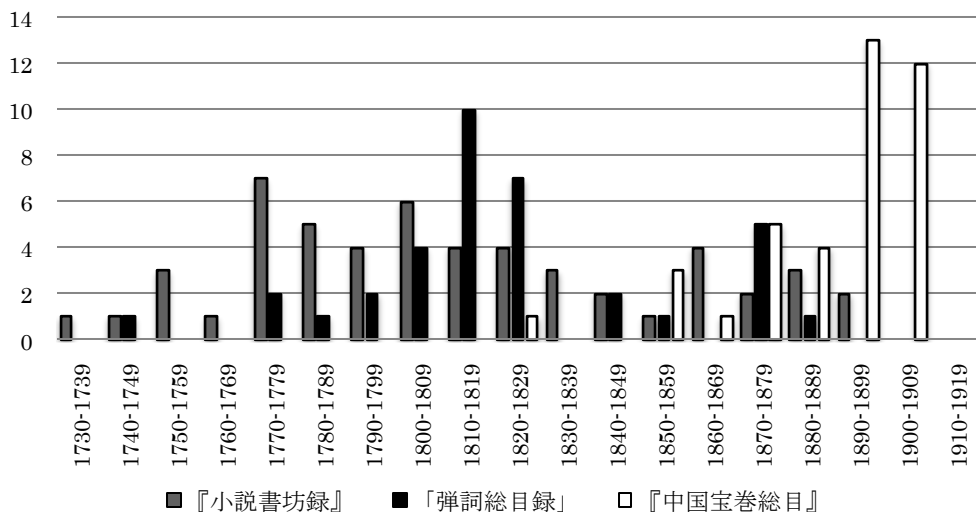
れ続けたことが論じられている。同治 10 年(1871 年)「禁毀小説書板」でも、「坊刻の小説は法律で厳しく禁じられているが、近頃各省の書肆は、大胆にも禁令を違反して刊刻し、公然と販売している(坊本小説、例禁纂嚴、近來各省書肆、竟敢違禁刊刻、公然售売)」¹³というから、禁書の影響は局所的或いは一時的であったのかもしれない。

5. 蘇州出版界の低迷

道光以降の一連の禁書活動以外に、阿片戦争後の上海開港(1843 年)、太平天国軍による占領(蘇州は 1960 年-1963 年)といった社会的混乱も、出版活動に影響を及ぼしたと考えられる¹⁴。本節では、それらの影響をうけて、代言体彈詞の主な刊行地である蘇州出版界が道光後期以降に低迷したことについて、彈詞や小説、そして宝卷のデータをもとに検討する。

下記の図表 2 は、先に表 2 や表 3 で示した彈詞と小説の蘇州における刊行点数と、さらに車錫倫『中国宝卷総目』(北京燕山出版社,2000 年、原版台湾中央研究院,1998 年)からも蘇州で刊行された宝卷刻本計 39 点を加えて年代別に集計したもので、次頁の表 4 はその書肆の内訳を示している。

図表 2. 蘇州刻本の年代別収録数 (単位: 点数)



清代江南における代言体彈詞の出版について

表 4. 図表 2 における書肆の内訳

		『小説書坊録』	「彈詞総目録」	『中国宝卷総目』
乾隆 1736- 1795	1730-39	呉郡崇徳書院(1)		
	1740-49	呉門仁壽堂(1)	姑蘇千鐘書屋(1)	
	1750-59	金閶書業堂(2) 姑蘇懷穎堂(1)		
	1760-69	呉郡崇徳書院(1)		
	1770-79	金閶寶仁堂(2) 四美堂(1) 金閶書業堂(3) 金閶書藝堂(1)	蘇州雲龍閣(2)	
	1780-89	金閶書業堂(4) 呉郡崇徳書院(1)	蘇州雲龍閣(1)	
嘉慶 1796- 1820	1790-99	呉郡崇徳書院(1) 金閶書業堂(1) 文淵堂(2)	古呉譚一葵(1) 蘇州仁徳堂(1)	
	1800-09	桐石山房(2) 金閶書業堂(3) 文淵堂(1)	蘇州仁徳堂(2) 藝海堂(1) 蘇州吾馨軒(1)	
	1810-19	講徳齋(1) 金閶書業堂(2) 聚盛堂(1)	醉墨軒(2) 吾馨軒(1) 蘭蕙軒(6) 姑蘇虞徳堂(1)	
道光 1821- 1850	1820-29	素心堂(1) 歩月樓(1) 金閶書業堂(1) 呉郡緑蔭堂(1)	金閶脩綆山房(1) 吾馨軒(1) 裕徳坊(1) 醉墨軒(2) 歩月樓(1) 蘇州經義堂(1)	蘇城瑪瑙經房(1)
	1830-39	古呉麟瑞堂(1) 桐石山房(1) 文淵堂(1)		
	1840-49	蘇州程世徳(1) 文淵堂(1)	蘇州愛蓮堂(2)	
咸豊	1850-59	文粹堂(1)	蘇州吟香書屋(1)	蘇州得見齋(2) 蘇州邵青雲齋(1)
同治 1862- 1874	1860-69	聚盛堂(2) 金閶書業堂(2)		蘇州得見齋(1)
光緒 1875- 1908	1870-79	姑蘇緑慎堂(1) 聚盛堂(1)	姑蘇緑慎堂(1) 玉績山房(2) 古虞喜雨山房(1) 姑蘇來青閣(1)	蘇州得見齋(4) 蘇州瑪瑙經房(1)
	1880-89	呉郡緑蔭堂(1) 聚盛堂(1) 姑蘇紅葉山房(1)	姑蘇紅葉山房(1)	姑蘇瑪瑙經房(3) 蘇州得見齋(1)
	1890-99	姑蘇映雪堂(1) 呉門甘朝士居(1)		蘇州瑪瑙經房(13)
	1900-09			蘇州瑪瑙經房(9) 蘇州李鈞芳齋(1) 蘇州九如香鋪(1) 蘇州祥興齋(1)

図表 2 を見ると、各ジャンルのピークは異なるものの、1830 年代から 1850 年代にかけてはそれぞれ点数が少ないのがわかる。1870 年代前後にやや回復したかのようであるが、時代が近いことを考えればやはり多いとは言えない。このように 1830 年代以降の減少は、代言体彈詞にのみに表れる傾向でないことから単にジャンルの流行り廃りによるものではなく、他の外因による蘇州出版界の低迷を反映している可能性は高い。表 4 で示した書肆を見ると、蘇州で刊行された彈詞刻本計 36 点に含まれる書肆は計 21 号で、小説は 53 点中計 21 号、宝卷は 39 点中計 5 号である。この中で代言体彈詞を刊行していたのは、蘇州雲龍閣、蘇州仁德堂、蘇州吾馨軒、蘇州醉墨軒、姑蘇虞德堂、蘇州蘭蕙軒、裕德坊、蘇州經義堂、蘇州愛蓮堂、蘇州吟香書屋、玉績山房で、その多くは嘉慶期前後に集中して表れている。

これら代言体彈詞を刊行するような小規模な書肆について営業実態を示すような史料は無く、その軌跡を辿ることは容易ではないが、当時蘇州にあった書肆について、葉德輝「吳門書坊之盛衰」には乾隆・嘉慶期の藏書家であった黄丕烈の「士礼居藏書題跋記」をもとに蘇州の書肆 24 号を紹介し、「当時久居蘇城、又值承平無事、書肆之盛、比於京師」¹⁵と当時蘇州の書肆が繁盛していた様子について記している。苦竹齋主人『書林談屑』(1947 年)においては、「吳門書坊、盛於前清乾嘉間」¹⁶とあり、王利器前掲書に所収の道光 17 年(1837 年)「各書坊公禁淫書議單條約」には、書業堂、掃葉山房、西山堂、興賢堂、文淵堂、桐石山房、文林堂、三味堂、歩月樓など、当時蘇州には 65 号もの書肆があったとする¹⁷。これらの文献の記載によっても、禁書活動や動乱が本格化する以前の乾隆・嘉慶期の蘇州では、代言体彈詞に限らず、様々な書物の出版活動が盛んに行われていたことが窺える。その後、葉德輝同書には「卒後二十余年、赭寇乱起、大江南北、遍地劫灰。吳中二百年藏書之精華、掃地尽矣」¹⁸とあり、戦乱によって書物が失われたことについて言及している。明以来の老舗の蘇州閭門の歩月樓が、同治期に上海に支店をおいたというのも、江南地域における出版活動が徐々に上海に集約されていったことを象徴する出来事

と言えるだろう。但し外地に店を展開できたのは資本をもつ一部の書肆に限られ、戦乱等による実害を被った零細な書肆も少なくなかったと考えられる。その後の蘇州の書肆について、何忠林「民国以来吳門書肆概説」(江蘇省出版史志編輯部編『江蘇出版史(民国時期)學術討論会文集』江蘇人民出版社,1991年)によると、民国時期に64号の書肆があったというが、そのほとんどが民国以降に発展したものだという。比較的古いものでも、掃葉山房や瑪瑙經坊を除いて、來青閣書莊は光緒4年(1878年)前後、靈芬閣は光緒13年(1887年)前後、東來書莊は光緒24年(1898年)、文學山房は光緒25年(1899年)にそれぞれ開業したというから、蘇州の書肆が回復に向かうのは同治年間(1862年-1874年)後期から光緒年間(1875年-1908年)にかけての時期であったと思われる。

蘇州出版界の低迷を示す例として、図表2にあげた宝卷について補足しておく。宝卷は弾詞と同様に江南地域に流行する講唱文学の一つであるが、同治期以降に多く刊行された所謂新宝卷の刊行地の中心は既に蘇州ではなかった。『中国宝卷総目』を基礎資料として集計した結果、1730年代から1930年代に刊行された宝卷の刻本484点中、刊行地が特定できたのはおよそ6割であり、その内訳は杭州75点、蘇州39点、常州38点、上海33点、北京13点、寧波13点、南京11点、鎮江9点、紹興7点、その他42点であった。表2の弾詞や表3の小説の刊行地でどちらかといえば副次的に表れていた杭州が宝卷の中心的刊行地となっており、そのほか常州、寧波、鎮江、紹興といった刊行地の出現も注目される¹⁹。蘇州で刊行された宝卷は計39点と第二位ではあるが、表4に見られるように、その内訳の大半は杭州に支店をもつ瑪瑙經坊によるものであった。また、図表2で示したように蘇州刻本は1910年代以降表れないが、杭州では1930年代まで宝卷の刊刻が続けられていた。そもそも、宝卷はその内容に宗教性を含む点で、娯楽性を重視した小説や弾詞とは本質的に異なり、出版や流伝の事情も違っていたと思われる。書肆について見ても、「弾詞総目録」中に記載される弾詞刻本の書肆約260号のうち約50号が『小説書坊録』にも確認でき、表4をみても弾詞と小説は紅葉山房や歩月樓といった共通

の刊行元があったことがわかる。それに対して『中国宝卷総目』に記される書肆は「弾詞総目録」や『小説書坊録』のものと全く重複しない。また、弾詞や小説が 1890 年前後に刻本から石印本に転換していくのに対し、宝卷は抄本や刻本が民国期まで流通しており、宝卷独自の出版背景があったと思われる。しかし、弾詞が嘉慶前後に蘇州を中心に、宝卷が同治前後に杭州を中心にそれぞれ盛んに出版され始めたことは決して偶然ではなく、これら講唱文学の発達が各地域における出版界の動向を共に反映していることが窺えるのである。

6. おわりに

以上、目録データの分析を通じて、清代中期以降の代言体弾詞の刊行点数や刊行地について検討を行い、その結果をもとに、代言体弾詞の出版活動に影響を及ぼしたと考えられる禁書活動や蘇州出版界の低迷について考察を行った。代言体弾詞の出版活動は清代嘉慶期に盛んに行われていたが、道光後期以降は停滞し、刊行点数も減少する傾向にあった。呉語を多量に含むことをその特徴とする代言体弾詞は、小説のように四川や広東等江南以外の地域に刊行地が拡大せず、さらに代言体弾詞の主な刊行地であった蘇州出版界は、禁書や動乱が続いた道光後期以降に衰退の兆しをみせていたのである。

その後、光緒後期から代言体弾詞の出版形態は刻本から石印本へ、そして主な刊行地は蘇州等江南諸地域から上海へと移行していくが、上海石印本の多くが刻本を基にした翻印であった。先述のように「弾詞総目録」には民国期の弾詞が十分に収録されていない可能性があるが、鉛印本・石印本・排印本が計 170 余種 500 余点ほど収録されており、そのうち代言体弾詞と確認できるのは 48 種 257 点である。すなわち、印刷新技術の導入により代言体弾詞の刊行点数は増加したとはいえ、作品種類は決して多くなく、作品種類の 9 割が刻本と重複しているのである²⁰。石印という技術

革新が代言体弾詞の新たな作品を創作、刊行する原動力と成り得なかったとすれば、それは何故なのか。清代に女性作家によって創作されることが多かった叙事体弾詞に関しては、民国期に鴛鴦蝴蝶派の文人を中心に創作、支持され、作風にも変化があったと秦燕春「鴛鴦蝴蝶文人的民間情結—以案頭弾詞創作及弾詞演出、發展為中心」(『蘇州大学学报』第5期,2005年)に指摘されている。代言体弾詞の変遷についても、出版活動だけでなく、当時の社会的な環境の変化、またそれによってもたらされた創作意識や受容形態の変化といった側面に注視する必要があるだろう。これらの課題については、稿を改めて考察を加えることにしたい。

¹中国では五四以降の俗文学者によって弾詞の通俗文学史的価値が認められ、資料の蒐集や書目類の整理が盛んに行われた。その際弾詞はテキスト形態によって大きく二つに分類された。張静廬『中国小説史大綱』(泰東図書局,1921年、未見。陳文瑛「蘇州弾詞研究」玄奘人文社会学院中国語文研究所,2004年修士論文第1章参照)において弾詞が「似“小説”而又近“伝奇”的変態」と捉えられたのを始めとし、胡懷琛『中国民歌研究』(商務印書館,1926年)は“直叙派”と“装演派”に、譚正璧『中国文学進化史』(光明書局,1929年)は“北詞”と“南詞”に、凌景埏「弾詞目録」(『東吳学报』第3巻3期,1935年)は“閱唱本”と“説唱本”に、李家瑞「説弾詞」(『歴史語言研究所集刊』第6本,1936年、蘇州市文化局『評弾研究資料』第1輯,1957年転載)は“叙事体”と“代言体”に、趙景深『弾詞選』(商務印書館,1937年)は“文詞”と“唱詞”に、鄭振鐸『中国俗文学史』(商務印書館,1938年)は“国音弾詞”と“土音弾詞”に、という具合にそれぞれ呼称をつけている。これらは一見紛らわしいが、例えば李家瑞は人物が一人称で語る白を含むか否かによって叙事体と代言体に、趙景深は上演用テキストとなり得るか否かによって文詞と唱詞に、鄭振鐸は方言の有無によって国音弾詞と土音弾詞に分類するというように、各々着眼点に違いがあるだけで、帰納すればみな弾詞とよばれるテキストに二つの体が存在することを指摘しているのである。

²民間出版業(坊刻)の発達と白話小説の発達の関係を論じる従来の研究で、明代では、大木康「明末江南における出版文化の研究」(『広島大学文学部紀要』第50巻,1991年、『明末江南の出版文化』研文出版,2004年転載)や、勝山稔「明代坊刻の出版状況と発達時期についての試論—『明代版刻綜録』におけるデータ解析を手掛かりとして—」(中国古典小説研究会,2002年度大会発表稿、大塚秀高『東アジア出版文化の研究：調整班C出版環境・D出版文化』

転載)、清代では、上田望「毛綸、毛宗崗批評「四大奇書三国志演義」と清代の出版文化」(『東方学』第 101 輯,2001 年)等が、目録の収録数を集計し、その集計結果から当時の刊行点数の推移を推し量るという手法を用いて成果をあげている。なお代言体弾詞の成立に関して従来の研究では伝奇や昆曲といった戯曲の影響が説かれており、本来ならば戯曲の出版状況とも比較検討を行うべきであるが、戯曲の出版形態は選集が多く、弾詞に匹敵する目録が無いことから、今回のような統計的手法によっては両者を比較し得なかった。³「弾詞総目録」は、鄭振鐸「西諦所藏弾詞目録」(『小説月報』第 17 卷号外,1927 年)、譚正璧、譚尋『弾詞叙録』(上海古籍出版社,1981 年)、胡士瑩、蕭欣橋『弾詞宝卷書目』増訂版(上海古籍出版社,1983 年)等 11 種の文献及び 26 箇所の所蔵機関の目録をもとに編集されている。

⁴倉田(1951)には弾詞作品を 45 種載せているが、「弾詞の結構には、略二種ある。一つは弾唱者が普通に述べ歌うものと、一つは弾唱者が、書中の人物の口振りを真似て会話する部分が入るものである。(中略)ここにあげた弾詞は後者に属するものである」とあり、基本的にそれらは代言体弾詞であると判断した。輪田(1996)には注 3 胡士瑩、蕭欣橋上掲目録に基づく弾詞の「テキスト刊行年表」が附録されており、倉田(1951)を参考にした上で数種の代言体弾詞を選定している。また輪田(2000)は車王府蔵の代言体弾詞 41 種を挙げている。周良(1996)からは、解題に「有唱詞和白、無表。有蘇州話、為丑、淨等用」等と代言体弾詞の特徴を記述するものを取り上げた。また輪田(1996)では代言体弾詞をさらに第三者の語り口である「表」の有無で分類し、表の有る「表混代言体弾詞」と表の無い「純粹代言体弾詞」に分類するが、今回後者を十分に確認できなかったため、その分類を行わなかった。

⁵注 4 前掲論考において分類記載の無いもので、今回分類の根拠とした版本は下記の通り。

『白獺全傳』8 卷 2 冊 嘉慶 13 年(1808)經苑堂蔵板刻本(北図)

『増廣繪像百鳥圖全傳』問梅居士撰 12 卷 24 回 4 冊 光緒 25 年(1899)鉛印本(上図)

『繡像福壽大紅袍』14 卷 100 回 14 冊 道光元年(1821)廢閑主人序 光緒 8 年(1882)重刻本(蘇図)

『繡像雙蝴蝶傳』3 卷 30 回 2 冊 乾隆 34 年(1769)香橋主人序 道光 3 年(1823)文會堂刻本(上図)

『拱壁縁傳奇』24 回 6 冊 隆怡安編 道光 8 年(1828)刻本(上図)

『繡像鸞鳳雙簫』18 回 4 冊 同治 4 年(1865)刻本(上図)

『繡像真金扇』10 卷 42 回 10 冊 道光元年(1821)鴛湖蔵板刻本(蘇図)

『巧合三縁』4 卷 16 回 3 冊 嘉慶 23 年(1818)刻本(上図)

『繡像雙冠詒全傳』4 卷 12 回 2 冊 光緒 20 年(1894)石印本(上図)

『繡像雙玉燕傳』4 卷 24 回 嘉慶 5 年(1800)序 武林務本堂刻本(北図)

『繡像水晶球全傳』38 卷 8 冊 嘉慶 25 年(1820)鴛湘悅成閣刻本(蘇図)

『天寶圖』10 卷 57 回 道光 10 年(1830)蓮溪書屋刻本(蘇図)

『繡像雲琴閣』52 卷 10 冊 嘉慶 17 年(1812)醉墨軒主人序 醉墨軒刻本(北図)

⁶「弾詞総目録」と『小説書坊録』に収録される版本に少なくとも 13 点重複が見られる。重複している版本を『小説書坊録』の通し番号で記すと、[140-3][1462][349-2][355-10][361-1][379][389][422][464-1][488-6][558][560][565]である。また、李豫、李雪梅、孫英芳、李巍編『中国鼓詞総目』(山西古籍出版社, 2006 年)とは 12 点重複が見られ、『中国鼓詞総目』の通し番号は[0028-1][0183-1][0327-1][0419-2][0554-1][0793-1][1200-1][1201-1][1734-1][1734-2][1850-3][1986-49]である。これら重複する版本は集計に含まない。

⁷地域の特定には、注 1 李家瑞上掲論考や本文中に挙げた王清原等編纂『小説書坊録』、張秀民『中国印刷史』の他に、孫殿起『琉璃廠小志』(北京古籍出版社, 2000 年、原版北京出版社, 1962 年)、楊繩信編著『中国版刻綜録』(陝西人民出版社, 1987 年)、江蘇省地方志編纂委員会編『出版志』(『江蘇省志』84 江蘇人民出版社, 1996 年)等を参照した。なお、地域を特定できない書肆に環秀閣、飛春閣等代言体弾詞の作品数種を刊行している書肆も含まれる。

⁸余治『得一録』巻十一之一、王利器 1981 年増訂本 p191 参照。

⁹余治『得一録』巻十一之一、注 8 前掲書 p193 参照。

¹⁰『勸懲淫書徵信録』、注 8 前掲書 p201 参照。

¹¹「小本淫詞唱片目」よりも「応禁書目」に弾詞と思われる作品が多く見られるのは、弾詞が長編形式をとることとも関係していると考えられる。弾詞の序文を集録する譚正璧、譚尋『評彈通考』(中国曲艺出版社, 1985 年)を参照すると、序文中に“弾詞”の字句が現れる作品が 21 種ある他に“伝奇”4 種、“南詞”2 種、“盲詞”3 種、“小説”2 種あり、さらには“弾詞唱本”3 種、“弾詞小説”2 種、“伝奇小説”1 種、“小説唱本”1 種といった名称も少なくなく、当時より弾詞の概念規定は曖昧であったことがわかる。弾詞が晩清まで“小説”の一部として扱われたことについては鮑震培『清代女作家弾詞小説論稿』(天津社会科学院出版社, 2002 年)第 2 章に詳しい。

¹²宋莉華『明清時期的小説伝播』(中国社会科学出版社, 2004 年)第 4 章第 4 節でも、禁書対象となった小説『歡喜冤家』、『肉蒲団』、『初刻拍案驚奇』等が道光・同治年間に依然流通していたことが述べられている。また村上公一「中国の書籍流通と貸本屋—禁書史料から—」(『山下龍二教授退官記念中国学論集』好文社, 1990 年)では、注 8 前掲書に収録される清代の禁書史料中に、資本屋に関する記述が徐々に増加していることが指摘されており、禁書の間も資本屋を通じて“淫詞小説”が流通していたと思われる。

¹³『大清穆宗毅皇帝實録』313 卷、注 8 前掲書 p83 参照。

¹⁴当時の社会混乱を示す指標として人口の減少について曹樹基『中国移民史』第 6 卷(福建人民出版社, 1997 年)第 10 章第 2 節を見ると、同治『蘇州府志』巻 13 によると嘉慶 15 年(1810 年)蘇州の人丁数は 319.8 万で、嘉慶 25 年(1820 年)は 338.8 万、道光 10 年(1830 年)は 341.3 万と増加傾向にあったが、同治 4 年(1865 年)の人丁数は 128.8 万とその 35 年間に約 65% も減少したという。同書では咸豐元年の蘇州人口を増加率をもとに 365 万と推定するが、これは上記の人口減少を全て戦乱による死亡者と仮定した場合であって、実際の人口減少の背景は詳らかでない。

¹⁵『書林清話』卷九(觀古堂,1911 年刻本)p214 参照。『民国叢書』編輯委員會編『民国叢書』第 2 編,50 文化・教育・体育類(上海書店,1990 年)所収。

¹⁶張静廬輯註『中国現代出版史料』丁編下卷,中華書局,1959 年(新版上海書店出版社,2003 年)pp637-660 参照。一方注 2 上田望前掲論文では、乾隆中期以降、蘇州では相次ぐ労働争議で刻工の賃金が上昇し、廉価な労働力のある外地へ出版工程の一部を委託するケースがあったことについても指摘している。

¹⁷余治『得一録』卷十一之一。注 8 前掲書 p190 参照。

¹⁸注 15 前掲書 p215 参照。

¹⁹清代中期以降に小説の刊行地が拡大したように、同時期の江南地域内でも刊行地の拡大或いは変遷があったと思われるが、今回はデータ不足ゆえに明確な結論を下すには至らなかった。例えば常州は同治以降に宝卷を多く刊行しているが、表 2 の弾詞や表 3 の小説でも同治以降に表れている。清代に常州の木活字印刷が盛んであったことについては、張秀民『中国印刷史』第 2 章や Cynthia J. Brokaw, Kai-wing Chow『Printing and book culture in late Imperial China』(University of California Press, 2005 年)第 9 章に詳しい。

²⁰「弾詞総目録」によると弾詞の石印本は 1880 年代に現れ始め、1890 年代に到ると刻本:石印本=32:99 と刻本点数を凌ぐ。ところが、刻本と重複しない代言体弾詞の石印本は 48 種中『雙玉玦』、『楊乃武』、『雲中落繡鞋』、『紫金鞭』の 4 種に止まる。